

実践事例 1

千葉県立千葉北高校は、2019年度に新教育課程の編成に着手し、約1年かけて完成させた。21年度には、同校が育成を目指す資質・能力である「7つの北高力」とグラウンドデザインを策定。いずれも策定の過程において教師間で徹底的に議論し、自校が目指す方向性を共有した。現在は、「7つの北高力」に基づいたルーブリックやシラバスの作成を、各教科で進めている。

徹底した議論を通じて教師間で 方向性を共有したことが、 ルーブリックの作成や 教育活動の改善を進める土台に

千葉県立千葉北高校

学校概要

設立 1975（昭和50）年
形態 全日制／普通科／共学
生徒数 1学年280人、2・3学年320人
2021年度入試合格実績（現役のみ） 国立大は、山形大、千葉県立保健医療大に2人が合格。私立大は、青山学院大、学習院大、國學院大、駒澤大、昭和女子大、成蹊大、成城大、専修大、中央大、東京理科大、東洋大法政大、明治大などに延べ388人が合格。

「多様な進路への対応」を
基本方針に、新教育課程を編成

2019年11月、千葉県立千葉北高校は、教務部と各教科の代表から成る「教育課程検討委員会」（以下、検討委員会）を中心に、新教育課程の編成に着手した。同委員会では、「多様な進路に対応できるバランスのよい教育課程」という、新教育課程の編成方

針を定めた。当時、同校にはグラウンドデザインがなく、新教育課程を編成するにあたって、教師間の目線をそろえるための基本方針が必要だったからだ。その方針の下で行われた議論を通じて合意形成を図りながら、生徒の希望進路の実現に向けて適切な学びを提供できる教育課程を策定した。

例えば、看護系や家政系の大学志望者には、これまで文系を選択することを推奨していたが、文系の現行の教育課程では、生物・化学のいずれかの履修となるため、受験校の選択肢を狭めてしまい、大学での学びに必要な科目を学習する機会を提供できていない状況だった。そこで、新教育課程では、文系でも生物や化学、地学、数学Cを複数選択できるようにした。科目選択の幅を広げたねらい

を、教務主任の森谷一雅先生は次のように説明する。

「大学で文理融合の学びや入試の多様化が進む中、科目選択を柔軟にすることが、生徒の可能性を広げると考えました」

基本方針の下、各学年の履修科目と単位数を算出。それを教務部が集約し、新教育課程の原案を作成した。各曜日の授業時数に差が生じないようにするなど、検討委員会でも議論を重ね、8つの試案を経て、21年3月、1学年32単位、2・3学年31単位の新教育課程を完成させた（図1）。



進路指導主事、
学校改善プロジェクトチーム
和泉雄介
いずみ・ゆうすけ
教職歴13年。同校に赴任して8年目。外国語科（英語）。



教務主任、
教育課程検討委員会
森谷一雅
もりや・かずまさ
教職歴14年。同校に赴任して9年目。理科（生物）。



校長
勝田幸裕
かつた・ゆきひろ
教職歴37年。同校に赴任して1年目。

※プロフィールは、2022年3月時点のものです。

図1 千葉県立千葉北高校 2022年度入学者 教育課程

教科	科目	標準 単位数	1年	2年	3年	
					文系	理系
国語	現代の国語	2	2			
	言語文化	2	2			
	文学国語	4		5		
	論理国語	4			4	4
	古典探究	4			4	
	*国語探究				(2)	
地理 歴史	地理総合	2	2			
	歴史総合	2		2		
	日本史探究	3			(4)	
	地理探究	3			(4)	
	世界史探究	3			(4)	
	*発展日本史				(2)	
	*発展地理				(2)	
*発展世界史				(2)		
公民	公共	2		2		
	政治・経済	2			2	(2)
	*公民探究				(2)	
数学	数学Ⅰ	3	3			
	数学A	2	2			
	数学Ⅱ	4		4		
	数学B	2		2		
	数学Ⅲ	3				4
	数学C	2			(2)	3
	*数学探究				(2)	
理科	化学基礎	2	2			
	生物基礎	2	2			
	物理基礎	2		(2)		
	地学基礎	2		(2)		
	物理	4				(4)
	化学	4			(4)	4
	生物	4			(4)	(4)
	地学	4			(4)	
	*発展物理					(2)
	*発展化学				(2)	(2)
	*発展生物				(2)	(2)
*発展地学				(2)		
保健 体育	体育	7~8	3	3	2	2
	保健	2	1	1		
	*生涯スポーツ探究				(2)	
芸術	音楽Ⅰ	2	(2)			
	音楽Ⅱ	2		(2)		
	音楽Ⅲ	2			(2)	
	*音楽探究				(2)	
	美術Ⅰ	2	(2)			
	美術Ⅱ	2		(2)		
	美術Ⅲ	2			(2)	
	*美術探究				(2)	
	書道Ⅰ	2	(2)			
	書道Ⅱ	2		(2)		
書道Ⅲ	2			(2)		
*書道探究				(2)		
外国語	英語コミュニケーションⅠ	3	3			
	論理・表現Ⅰ	2	2			
	英語コミュニケーションⅡ	4		4		
	論理・表現Ⅱ	2		2		
	英語コミュニケーションⅢ	4			4	4
	論理・表現Ⅲ	2			3	2
*英語探究				(2)		
家庭	家庭基礎	2	2			
	*生活探究				(2)	
情報	情報Ⅰ	2	2			
	情報Ⅱ	2			(2)	
教科単位数合計			30	29	29	29
総合的な探究の時間			3~6	1	1	1
特別 活動	ホームルーム活動		1	1	1	1
	合計単位数		32	31	31	31

注)「*」は学校設定科目。 ※学校資料を基に編集部で作成。

議論を尽くすことで、
生徒主体の教育課程に

1年次の単位数については、特に議論を尽くした。同校は学校行事や部活動が盛んであるため、これらの活動時間を確保しようと、授業終了時刻は全学年同じにする予定だった。そこで当初は、新教

育課程も現行課程と同様、各学年31単位とすることにしたが、必修科目の「情報Ⅰ」を入れるため、1年次のみ32単位とした。だが、議論を重ね、7つめの試案ができ、21年1月、1年次を31単位にする方法を再検討しようという話が教務部内で持ち上がった。各教科に再度の検討を呼びかけ、選択科

目の増加や保健体育の単位数減など、様々な方法を試みた。しかし、どの方法も問題が生じることが分かった。32単位で最終確定させた。「誰もが納得できる教育課程を編成するために、あらゆる可能性を検討しました。時間はかかりましたが、議論を尽くしたことで、教師間で問題意識を共有すること

ができ、結果的に、学校として大事にしたいことについて、全教師で目線を合わせることができました」(森谷先生)

議論を重ねる中で、教師の発言にも変化が表れた。当初は他教科に対して意見を言いづらい雰囲気があったが、議論が深まるにつれて、「理系でも数学Ⅲを選択にし

ではどうか」などと、教育課程全体を俯瞰した提案や生徒目線での意見が出るようになった。20年度から同委員会に加わった和泉雄介先生は、次のように語る。

「生徒のことを考えた意見だとしても、他教科のことにはなかなか口を出しづらいものです。しかし、あらゆる角度から、時間をかけて教育課程を検討する中で、自然と率直に意見を述べ合えるようになっていきました」

教務部が的確にマネジメントしたことも功を奏した。

「教務部からは、教育委員会へ新教育課程を提出する期日から逆算した検討スケジュールと、各教科で検討すべき事項が示されました。見通しや論点が明確だったことで、意見を出しやすかったのだと思います」（和泉先生）

新教育課程の編成の意図や議論の過程は、文書として残した。議論を尽くした編成の過程を明文化することで、今後の改訂時に検討の土台としたり、異動してきた教師に新教育課程に込めた思いを引き継いだりするねらいがある。

教師のボトムアップにより、 ブランドデザインを策定

21年6月には、千葉県教育委員会からの通達を受けて、ブランドデザイン（以下、GD）とスクール・ポリシー（以下、SP）の策定に着手した。そこで、学校内の諸課題について議論する組織体である「学校改善プロジェクトチーム」（以下、PT）が、策定までの工程を整理し、まずは生徒・教師・保護者にアンケートを実施。生徒が身につけるべき資質・能力や、同校が強化すべき点などを調査し、その結果と職員会議での議論も踏まえ、育成を目指す資質・能力を、「徹底力・課題発見力・思考力・実践力・創造力・協働力・自己改善力」の7つに設定した。その「7つの北高力」を軸としたGD・SPを策定し、22年3月、「千葉北GD」にまとめた。

GDの策定を受けての新教育課程の変更は行わなかった。それは、21年度に赴任した勝田幸裕校長の考えによるものだ。

「本来、GDを踏まえて新教育

図2 各教科のルーブリック 理科

評価の観点	知識・技能	思考力・判断力・表現力	主体的に学習に取り組む態度
7つの北高力	徹底力・課題発見力	思考力・実践力・創造力	協働力・自己改善力
評価基準	A 十分満足できる (探究・活用)	自然の事物・現象から問題を見だし、見通しを持って観察、実験などを行い、得られた結果を分析して解釈し、表現するなど、科学的に探究している。	自然の事物・現象に主体的にかかわり、見通しを持ったり、それまでの過程を見直したり、振り返ったりするなど、科学的に探究しようとしている。
	B おおむね満足 できる(習得)	見通しを持って観察、実験などを行い、得られた結果を分析することができる。	自然の事物・現象にかかわり、見通しを持ったり、それまでの過程を見直したり、振り返ったりすることができる。
	C 努力を要する (未達)	見通しを持って観察、実験などを行うことや、得られた結果を分析するための努力を要する。	自然の事物・現象にかかわることや、見通しを持ったり、それまでの過程を見直したり、振り返ったりするための努力を要する。
評価方法	<ul style="list-style-type: none"> 定期考査（知識を問う問題） 単元テスト（知識を問う問題） プリント（記述分析） 実験、観察 	<ul style="list-style-type: none"> 定期考査（論述等の問題） 単元テスト（論述等の問題） レポート、プリント（記述分析） 	<ul style="list-style-type: none"> レポート、プリント（記述分析） 授業中の発言 教師による行動観察 生徒の自己評価や相互評価

上記は、理科のルーブリック。現在も改良のための議論を重ねている。「7つの北高力」を3観点それぞれにあてはめ、文部科学省「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について（通知）」の別紙5に示された「各教科等の評価の観点及びその趣旨」を基に、その教科で育成を目指す資質・能力を設定した上で、ルーブリックの作成を進めた。しかし、3観点と、それぞれにリンクする「7つの北高力」の整合を図ることに難航しているという。

※学校資料を基に編集部で作成。

不断の改善で推進する 生徒主体の新教育課程

課程を編成すべきですが、新教育課程は既に完成していました。GDの策定に専念したいと考え、新教育課程は変更しないと本校の教師に伝えました。重要なのは、教師自身が自校の進むべき道を考えることです。本校の方向性は、新教育課程の編成の過程で議論を尽くしていたので、GDにもそれが反映されると考えましたし、実際、新教育課程とGDは根底でつながるものとなりました」

3 観点と「7つの北高力」を結びつけたルーブリックを作成

現在は、「千葉北GD」を踏まえ、観点別学習状況の評価の3つの観点（以下、3観点）と各観点に対応する「7つの北高力」を示し、それぞれ3段階で評価するルーブリックを、教科ごとに作成している（図2）。そして、それを基に各科目のシラバスを作成する予定だ。

各教科のルーブリックは、「7つの北高力」を強く意識づけるものとするために、3観点と「7つ

の北高力」をリンクさせる方針とした。そこで、国立教育政策研究所の学習評価に関する資料（*1）に示された評価規準に「7つの北高力」を落とし込む形で、各教科のルーブリックの作成を進めようとしたが、3観点と「7つの北高力」の整合を図るのに苦労した。勝田校長は、そうした試行錯誤に意味があると語る。

「本校で学ぶ意義を生徒や保護者が理解するために、そして、GDを具現化するために、『7つの北高力』と結びついた評価規準が必要だ。大いに悩みながらも、教師自らが考え抜いてつくるからこそ、授業で活用できる評価規準になると期待しています」

各科目とも、22年度のスタートに向けてシラバスの準備を進めている。2学期以降のシラバスは、1学期での運用結果を踏まえて順次改定していく。

「1学期に運用し、よかった点は2学期以降も継続し、不具合があったのならば改善する方針を進めました。試行錯誤をいとわず、PDCAサイクルを回していきま

す」（勝田校長）

議論する文化が生まれた今こそ、教科横断型授業を実施したい

今後は、学校行事や部活動などを含むすべての教育活動と「7つの北高力」を結びつけ、「7つの北高力」の育成と評価を進めていく考えだ。

授業改善も大きな課題だ。特に、主体的・対話的で深い学びや探究的な学びを充実させるためには、家庭学習のあり方が重要になる。そこで、ICTを活用する課題や反転学習の導入など、あらゆる選択肢を検討していくという。

さらに、カリキュラムマップ（*2）などを使って、各教科の学習内容やそれを通じて育成を目指す資質・能力についての情報共有を

進め、教科横断型授業を行うことも視野に入れている。

「教育課程の編成やGDの策定を通して教科内の目線がそろった今こそ、教科間の連携が強化できるのではないかと思っています。教科横断型にすることによる授業の相乗効果を上げつつ、教師の大きな負担とならない授業の方法を検討していきます」（勝田校長）

何より重要なのは、GDに基づいた授業改善や学習評価を実質化することだと、森谷先生は語る。

「現状で最善と思える教育課程やルーブリックができましたが、それらを実施・運用していく中で様々な課題が出てくるでしょう。課題を一つひとつクリアしながら、新学習指導要領のねらいと『千葉北GD』の実現に近づいていきたいと思っています」

4月以降の課題

- 教科ごとにルーブリックを作成し、それを基に、各科目のシラバスを作成する
- 学校行事や部活動などにおいて育成を目指す「7つの北高力」をそれぞれ明確にし、それらの評価を行う

*1 『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料。

*2 卒業までの到達目標に、各教科・科目がどのように関係するのかを示したものの。